

公益社団法人 横浜市幼稚園協会発行
〒221-0055
横浜市神奈川区大野町1-25
横浜ポートサイドプレイス アネックス5F
電話 045 (534) 8708
<http://www.kids-yokohama.or.jp>
編集 横浜市幼稚園協会広報部
発行者 木元 茂
印刷所 合資会社横浜大気堂

協会報 浜私幼

一般版

No.265

- ▼第53回 横浜市幼稚園教育研究大会
- 第55回 神奈川県私立幼稚園教育研究
横浜地区大会 開催
- ・シンポジウム要旨
- ・分科会報告
- ▼第23回 父母セミナー
- ▼第2回 教員研修会



第53回 横浜市幼稚園教育研究大会 第55回 神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会 「今だから考えよう! 幼稚園教育の本質を!」

平成28年1月23日(土) 神奈川県民ホール他

平成28年1月23日(土)、神奈川県民ホールで、第53回横浜市幼稚園教育研究大会が開かれ、会場は横浜市内の幼稚園教職員を始めとした多くの参加者がつめかけ、盛大な開催となった。

開会式では、運営委員長であり、神奈川県私立幼稚園連合会会長の小澤俊道氏より「平成28年度の私立幼稚園に対する補助金額を見ると、就園奨励費補助金は三百数十億円に増額された。これは幼児教育無償化への段階的な一歩である。国の法律の中に幼児教育を位置付け、私立幼稚園の基盤となる安定した財源を国から拠出していただけるよう、幼児教育振興法を国会で作っていただきたいと署名をお願いしたところ、全国から2か

月で400万を超える署名が集まった。日々の保育は、こういった形で国の法律や制度や補助金、また県から、市からの様々な支援を受けながら展開できることに改めて感謝申し上げたい」との挨拶があった。

続いて木元茂横浜市幼稚園協会会長は、「子ども子育て支援新制度が施行されたが、横浜市はすべての園が私立であり、どの園も独自の保育哲学をもって保育をしている。また、国は0～2歳の小規模保育所をたくさん作ろうとしているが、3歳の進むべき場所はどこか。横浜市は6割の幼稚園が、横浜型預かり保育を行っている。ぜひ広い園庭があり、豊かな環境の幼稚園で過ごしてほしい」と述べた。

続いて来賓を代表し、柏崎誠横浜市副市長より「幼児期の教育は、将来の人格形成の基礎となるため、教育・保育の質の向上のためには、研修が必要である。その上で、園内外の研修、実践研究、自己・外部評価を組み合わせることが重要で、市としても研修の拡充に取り組んでいきたい」と、今大会のテーマである「保育の質をどう高めていくか」について、力強いお言葉をいただいた。

引き続き行われたシンポジウムでは今後求められる主体的な学び、問題解決能力の基礎を育むために、どう保育を変えていくべきか、3名の先生方が専門的な立場から意見を述べられた。



横浜市幼稚園教育研究大会 シンポジウム 要旨

●テーマ 保育の質をどう高めていくか ～保育をひらいていくこと・園内研修を工夫すること～

●シンポジスト

神戸大学発達科学部人間形成学科准教授	北野 幸子先生
舞鶴市健康子ども部子ども育成課	飯田 美和先生
認定こども園せんりひじり幼稚園・	安達 譲先生
ひじりにじいる保育園園長	

●コーディネーター

関東学院大学教育学部こども発達学科講師	三谷 大紀先生
---------------------	---------



コーディネーター三谷大紀先生は「皆さんが取り組む日々の保育の営みが、いかに社会的に意味があるか。それを発信するためには何をやっていくべきかを考えたい」となげかけた。そして認定こども園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいる保育園の取り組みや、幼児教育に関する海外の研究などを紹介した。

保育の記録

舞鶴市では公・私立や幼稚園・保育園の枠を超えた研修が活発に行われている。その立役者は、同市子ども育成課の飯田美和氏である。かつて同市では、昔ながらの一斉保育がメインだったが、子ども子育て支援新制度開始を前に、子ども主体の遊びを中心とした保育に改めていく機運が高まる。「自分達公立だけでは市全体の質は良くならない」と、公・私立を問わず舞鶴市全体の保育を向上させていくことを目指した。

もともと研修自体には熱心な自治体だったが、単発の研修で講演を聞いても、なかなか園の保育は変わらない。都市部の研修に参加すると1日がかりになってしまう地理的条件もあった。

そこで、定期的に研究者に来てもらい、保育を公開し、アドバイス

を受けながら保育者で改善していくという試みを始めた。行政が幼稚園、保育園を巻き込み、研究者をつなげる役割を果たした。

こうしてスタートした保育の質向上プロジェクト。主に写真を用いてドキュメンテーション(保育の記録)を作成し、振り返りに活用していった。これを保護者にも積極的に開示することで、遊びで育つ子どもの力、という点が理解しやすくなった。取り組みを続けていく中で、こうした書きものが苦手な保育者も変わってくる。

子どものしたことや言ったことに、保育者が思ったこと、という表面的な視点から、何に興味・関心を持ち、発見しているのか。その背景にある子どもの目線の先に何があるのかという深層的な視点に変化した。

今後はこうした研修で専門性を高めた保育者について、新たなキャリアパスが与えられるような、制度レベルでの改善も目指しているという。

育つ姿の可視化

同じく保育を可視化する取り組みで、毎月、園児1人ずつ、写真付きの「ポートフォリオ」を作成しているのがせんりひじり幼稚園である。

保育者の意図の下、遊びや生活

の中で子どもが育つということは、保護者には伝わりづらい。連絡帳などで、言葉だけで見ても難しく、かといって参観日に招いても、保育者の解説なしには、「うちの子はできる／できない」という結果の姿で見てしまいがちだ。

同園では4年ほど前から毎月、写真を使って園内研修を実施していた。「子どもの育つ姿が可視化され、本当に楽しい」という声が職員から続々と上がるようになっていた。そうした育つ姿を保護者にも伝えたい、という願いの下、ポートフォリオを作成、育ちや発達の見通しが保護者にもよく伝わるようになる。

「ただしこれが義務的な作成物になってしまうと、発行は決して続かない」と安達園長は言う。「子どもの育ちを保育者集団で楽しく語り合える、そんな職場であるというのがベースにある」。

世界の幼児教育に詳しい神戸大学大学院の北野幸子准教授は、「かつてフレーベルや倉橋惣三が言っていたことを、違う視点から確証するようなことが近年世界中で言われている」と指摘した。その上で保育者に求められていることを、「子どもの興味・関心を見取り、子どもの興味・関心・探求心にその都度応えるのが大事な幼児教育の本質」とまとめた。

分科会

第1分科会 特別研究委員会 1

ワークピア横浜3F



子どもが夢中になって遊ぶ保育とは？ ～遊びがひろがる環境の工夫～

助言講師 ● 十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授 宮里 暁美 先生

この分科会では、保育室や園庭の様々なもの（砂場・園庭遊具・自然物・ままごと・製作コーナー等々）は、どのような意味を持っているのか、環境のあり方について、各園の環境と子どもの姿を通して研究をしてきた成果を発表した。幼稚園協会では毎月行う特研1では、子ども達の「やってみたい」「もっとやりたい」「面白い」を引き出すための環境とはどういうものなのかについて、一年

間、各学年ごとのグループに分かれて話し合いを重ねてきた。その中で、様々な環境の中で、子どもとそこにいる保育者が一緒に環境を作り上げていくことが、遊びの広がりにつながり、夢中になれる場となっていくのだということを改めて確認することができた。そこで、この分科会でも、参加者がグループごとに分かれ、短い時間ではあったが、特に砂場についてそれぞれの意見を出し合うことで、環境と保育者のか

わりについての理解を深めていった。
(教育研究部 渡邊 英則)



第2分科会 特別研究委員会 2

ワークピア横浜2F

「保育のおもしろい」を探そう

助言講師 ● 青山学院大学教育人間科学部教育学科教授 小林 紀子 先生

特研2では自園での子どもの遊ぶ姿を持ち寄り、「子どもの経験していること」を多角的にとらえ、遊びの中での子どもの学びを明らかにしてきた。今年は子ども達が夢中になり遊んでいる姿の中から『保育のおもしろい』をテーマにそれぞれの園から写真を持ち寄り、その写真を眺め、語り、『子ども理解』を深める研究を続けた。その発見と、感動を研究発表の場でも分かち

合うことができるようにと話し合いを重ね、『ワールドカフェ方式』でリラックスした関係の中での状況を作り、子どもの実態を読み取る実践的な研修を試みた。当日は190名にも及ぶ参加者が分団での白熱した話し合いを行い、その後、年齢ごとの3例の

研究発表と講師から『保育のおもしろさを、主体的に学ぶ』ことの意義がまとめられ、非常に良い学びとなった。
(研究部 宗野 鏡子)



第3分科会 特別研究委員会 3

横浜ワールドポーターズ

どの子にもうれしい保育の探究

～障がいのある子どもや関わりの難しい子どものいる保育実践を考える～

助言講師 ● 國學院大学人間開発学部子ども支援学科准教授 野本 茂夫 先生



特研3では「障害のある子どもや関わりの難しい子どものいる保育の中で、子どもたちの育ち合いが生まれ、育み、成長し合う『どの子にもうれしい保育』』ということを、各園から事例を持ち寄り、対話を重ねながら研究を進めて来た。その事例発表として【子どもが安定して園生活を送ることとは～

新たなことや苦手なことに混乱や葛藤を感じるHくんが、園生活を通して、自ら安定させ成長していくために必要な保育者の関わりとは～】をテーマに話された。その後、その発表を受けて、参加者が各グループに分かれて模造紙に自身の思いや気づきを書き留めながら話し合いを行うワールドカフェ方式で話し合いを行い、対話による気づき・学

びを体験した。
(教育研究部 櫛木 元生)



第4分科会 鶴見支部

横浜ワールドポーターズ

「いいこと思いついた!」その子どもの中にある造形表現の育み ～えがきつくる中での「見立て」と「仕立て」～

助言講師 ● 鶴見大学短期大学部保育科講師 鯨島 良一 先生

この分科会では大きな視点が示された。一つは、子ども達が「えがきつくる」活動の中で「いいことおもいついた!」という、子どもの中から生まれた発想(見立て)に眼をむけること。もう一つは、「こうしてみよう、ああしてみたらどうだろう…」という意欲や工夫(仕立て)に対してどのように見守り、支援できるか考えることである。この視点から集めた事例から三例の

発表が行われた。続いて短時間のワークショップがあり、先生自身が「いいことを見つけ、感じ取る姿勢を持ち、子どもたちを支援する」ことについて考える時間となった。助言講師の言葉からも、子どもの発想を無理に固定しない緩やかさが感じられ、保育の形態の違いを超えた造形活動の捉え方が生かされている研究に思えた。

(広報部 浅沼 郁子)



第5分科会 中支部

神奈川県民ホール 小ホール

保育者の音楽性を高めよう ～フィットネスソングから学んだこと～

助言講師 ● 全日本ピアノ指導者協会会員・こまば会ピアノコンクール審査員／

リトミック上級資格認定指導者・音楽教室主宰等

鈴木 まり 先生

● 日本音楽療法学会正会員／

都内にて音楽教室、フィットネスソング主宰・オペラ出演

山中 淳子 先生



県民ホール(小ホール)で開催された第5分科会では保育現場における音楽を研究テーマとした中支部の2年に渡る研究の成果が発表された。「フィットネスソング」とは、喉に負担をかけない呼吸法(腹式呼吸)の修得を土台に大きな表情、楽しい動作を意識しながら歌うための身体づくりの音楽実践であり、その実際について音楽の四つの要素①リズム②メ

ロディー③歌詞④ハーモニーに分けて丁寧な発表が行われた。続く公開講義では音の長さを動物の動きで表現したり、ハンドサインによって音の高低を表現したり、また歌詞は叙事(事柄表現)と叙情(感情表現)に歌い分けられることを参加者全員が参加しながら体験することができた。身近な音楽がテーマであったがその奥深さを改めて認

識させられる発表であった。

(広報部 志田 元)



第6分科会 南支部

横浜市教育会館

幼児期の運動遊び

助言講師 ● 日本体育大学教授(体育学部長)／神奈川県教育委員会教育委員長 具志堅 幸司 先生



最近「運動能力が低下している」「すぐに疲れる子が多い」とよく耳にする。幼児期に十分に遊び、運動の楽しさを体験することで、体力・運動能力の向上、社会適応能力の発達、認知的走力の発達を促し、運動能力

は幼児期に80%、12歳までには100%育つと言われている。

分科会の前半は、体育的なゲームや縄跳びの活動の事例が3園より発表された。各年齢によって、活動に取り組む子ども達の様子や指導方法が映像にまとめられ、わかりやすい内容だった。後半は、元オリンピック体操選手の具志堅幸司さんの講演だった。ご自

身の幼児期から指導者としての現在までのお話は、私達保育者として共感でき、納得のできる事の連続だった。特に「子ども達をいろいろな角度からよく見ていると見えてくる」とおっしゃっていたが、全大会のシンポジウムから繋げて『保育の質』を考えることができた分科会だった。

(広報部 関根 由華)

第7分科会 旭支部

神奈川産業振興センター 14階 多目的ホール



関わりの難しい子どもの研究 ～関わりの難しい子どもの今日的課題～

助言講師 ● 元玉川大学教授／渋谷区子ども総合支援センターチーフアドバイザー
阿久澤 栄 先生

第7分科会では「関わりの難しい子どもの今日的課題」についての事例発表を四人の先生がし、どの園にも身近にいる難しい子どもの課題と成長が報告された。その後助言講師の阿久澤栄

先生よりその事例に基づいた講演があった。「関わりの難しさ」の原因を、本人、母親、先生という3つの視点から考察した。多くの示唆に富むお話の中でも、人間のタイプには理屈っぽく子どもにものを言う継次処理型と「だめ」の一言しか言わない同時処理

型の二つがあり、親と子でタイプが違ふと両者にすれ違いが起こり、母子関係が悪くなるという指摘には深く頷かされた。障がいのあるなしにかかわらず、すべての人に「大切にされ感」が必要であるとまとめられた。

(広報部 岩崎 泉)

第8分科会 港北支部

ヨコハマジャスト1号館 8F

鬼遊びを通してみる保育

助言講師 ● 玉川大学教育学部教育学科教授 岩田 恵子 先生

近年子どもの体力低下や身体の使い方についての課題改善の一つとして幼稚園での遊びで身体を動かす『鬼遊び』に注目し、今回のテーマとした。発表では、まず3才、4才、5才の子達の鬼遊びの現状を先生方の寸劇で確認した。鬼決めの仕方、ルールを守らない、遊び方が理解できない、鬼遊びに出たり入ったりする子がいることなどが保育者の悩みであり課題として取

上げられた。ただ先生に追いかけるのが楽しみな3歳児から、鬼遊びを体験していく中で子ども同士でルールを考え始めるような力が育ってくる5歳児等、成長段階によって保育者の役割も大きく違うこと等について発表された。

子どもの成長にとって鬼遊びは、体力、瞬発力、コミュニケーション力、協力する、あきらめない気持ちが育つ



きっかけになる等、幼稚園での重要な活動であると再確認した。

(広報部 内藤 光雄)

第9分科会 瀬谷支部

神奈川県民ホール6F 大会議室

あそび心を広げる保育者のかかわり ～あそびの創造～

助言講師 ● NPO法人 あそび環境Museumアフタフ・バーバン理事長
北島 尚志 先生



第9分科会では、まず講師の北島先生の紹介があり、どうしたら楽しく遊べるか、やってみいたいという気持ちになれるのかをゲームで参加者全員が体験した。発表は心と体を柔軟に拓いてあそびを創造する「あそび心」をテーマに「素材あそび」「イメージあそび」「絵本を手がかりにしたあそび」

の3つの観点から、3歳児、4歳児、5歳児の各2例ずつの事例が発表され、ほんの少し子どもへアプローチを変えるだけで、子どもの生き生きした表情や姿勢の変化がみられたとの実践報告があった。

最後に北島先生より、あそびの中で子ども自身から生まれる「どうして」があそび心を広げ、工夫し、この過程で規定を学んで行く。この経験で自己肯定感が構築されるので、保育者は子

どもの良き共感者としてかかわる事が大切というお話があった。

(広報部 安藤 宗博)



横浜市幼稚園協会と横浜市幼稚園父母の会連合会共催で、保護者を対象に毎年父母セミナーを開催している。今年度は第23回の開催となり、これからの子どもの教育がどのように変わっていくのかを、学習指導要領の改訂に携わっていらっしゃる奈良正裕先生を講師にお迎えし、講演をいただいた。横浜市子ども青少年局からも4名のご来賓においでいただき講演を傾聴いただいた。500名に及んだ参加者も熱心にメモをとる姿があり、幼児期の育ちの重要性を再確認する講演であった。次に講演の要約をご紹介します。



幼稚園で培う21世紀型学力の基盤

上智大学総合人間科学部教育学科教授 ● 奈良正裕先生

これからの時代は学力重視の時代に突入していきます。世界はいよいよグローバル化し、国際的な競争は熾烈になってきています。資源のない日本は人材の力、学力に依存するしかないのです。そうお話しすると、幼稚園で小学校の教科指導の前倒しをすればいいと思われがちですが、違うのです！このことを解っていただけるとありがたいと思います。

ということかという、「学力」という言葉の意味がもう既にすっかり変わっているのです。

「学力」の概念

今、小学校が動いている平成20年度の学習指導要領で既に変わっています。平成19年から始まっている全国の学力学習状況調査ですが、順番やスコアが大事なのではなく、実はテストの中身が大事なのです。A問題とB問題があります。A問題とは、知識、技能中心のコンテンツ（内容）ベースの問題、これは皆さんが子どもの時と変わらない問題です。全国で正答率96%とはかなり高い数字です。ところが問題はB問題なのです。これは皆さんがお子さんの時にはなかった問題です。資質、能力（思考力、意欲、社会スキル）中心のコンピテンシー（適

格性）ベースの問題です。こちらの正答率はなんと18%、A問題に比べB問題の正答率は落ち込みます。なぜでしょう？A問題に比べB問題には情報として余計な数字があり、少し考えなければ解けない問題なのです。A問題は、覚えていることで解けるだけ、それを「学力」と呼んでよかったのでしょうか？という問いになっている訳です。平成19年から文科省はこの2種類の問題を生み出しました。これはとても画期的なことで「学力」の考え方を考える発想だと思います。もちろん、教わったことをそのままよく理解して覚えて、適切な場所で出せるA問題も必要ですが、ただ知識をオウム返しに返せばいいのか……大人になった時どうでしょうか？オウム返しに返して褒められるのはクイズ番組だけです。社会に出た時には必ず、知識というのはB問題のように組み合わせたりして答えたり、自分の意見を言ったり、余計な情報もあるのは普通です。そんな状況の中で、問題解決ができ、表現ができるということまでを含めて「学力」と考えようというのが、今の学力論であり、日本だけではなくピサという国際学力調査でもあり、世界的な動向です。

むしろグローバルスタンダードの学力はB問題学力といえるのです。

幼児教育が大事にする 非認知的能力

この「学力論」というのは新しい話ではなく、実はこのように昔から考え方が2つありました。

ハーバード大学の心理学者マクレランドがコンピテンシーに注目したところ、コンテンツベーステストの成績が将来の社会的成功や人格的円満さ、または市民としての健全さを予測しない、という研究をしました。A問題がどんなに出来る人でも10年後、20年後の仕事ぶりには一切影響がないということがわかったのです。すごくよく仕事が出来ると凡庸な人とは何が違ったのでしょうか？

3つ大きなポイントがあったのです。

- ①相手の気持ちを汲み取る能力、反応を予測する能力⇒高度なコミュニケーション能力
- ②他の人に前向きの期待を持つこと。敵対する人も含め、全ての人の尊厳と価値を認める強い信念。更にストレス下でもこの前向きさを保ち続ける能力⇒倫理観、寛容さ、意欲、自己調整能力
- ③政治的ネットワークをすばやく学ぶこと。そのコミュニティで誰が誰に影響して、各人の権力的立場がどのような影響をしているかをすばやく読み取る力⇒社会的スキル

これら3つは、職種に関係なく人間が仕事をする上で、または社会的成功を果たす上で、あるいは人格的円満さや市民として健全に生きていく上で、極めて大事な要素であることがわかるといえます。しかし、これらを学校で教わりましたか？これらをテストされて皆さんの人生を左右されたことがありますか？ないのです。ないのですが、本当に人の社会的成功を左右し、人格的円満さを左右し、市民としての健全さを決定しているのは例えばこういうもののなのです。これらは非認知的能力といわれ、幼児教育ではとても大事にされています。

物を知っていると、何か上手にできるだけでなく、コミュニケーション能力、自己調整能力、社会スキルのようなものを幼児期に育てることは、色々なことを教わって身に付けること

よりも大切なのです。今後は小学校以降も含めてこういった能力を重視していき、「人格」とか「社会性」という言い方ではなく、「学力」という位置づけでカリキュラムに入れ、正當に評価しようということになるでしょう。

産業社会から 知識基盤社会へ

コンテンツテスト以上にこういったことが人生の成功を左右するのであれば、少なくともコンテンツと同様にこれらのことを重視していかなければいけないのではないのでしょうか？

既に多くの先進国ではこういったものをカリキュラムの中に反映させています。日本のB問題のようなものも、こういった流れの中で出てきたのです。「学力」という概念が日本は元より、国際的に大きく変わってきました。それは「学力」を豊富化しようということで、全人格的な身体や感情、社会性も含めた全てを人間に育てるために培ってきた、幼児教育のあり方とまさに共通するもののなのです。

それではなぜ今、コンピテンシーなのでしょう？これには、産業社会から知識基盤社会へと社会構造が変化したことが関係しています。知識を自在に活用したり、新たな知識を自力で生み出すことができる、そんな子どもが求められる社会になってきています。基本性能が大事だった昔は、生産の現場は元より開発の現場ですら、やるべき仕事の「正解」が決まっていたので、人材も既に決まっている「正解」を身に付けて、それを定期的に繰り返し出していく、またはそれを我慢強く続けられる人が求められていました。材料や工賃だけで物の価値が決まっていた昔とは違い、今の経済社会は知識、アイデア、発想、イノベーションで動い

ていますので、「正解」はない社会になり、新たな「最適解」を創出していかねばなりません。今の子ども達が大人になる頃には、これが更に進んでいるでしょう。

自由を適切に使いこなせる 人間に育てる

つまり、思考、判断、発想、構想、他者との協働、自己調整能力が全ての人に求められる時代になってきたということです。

そう考えると今の子ども達はたしかに不安です。でも自由なのです。大事なことは、この不安に負けることなく、自由を適切に自分で使いこなせる人間に育て上げることでしょう。

不安と自由はセットです。安定と抑圧もセット。だけど今の時代、前者しか選べません。不安に負けない為には「私が私に納得のいく最適解をその都度生み出していく」という覚悟をお子さん達に持っていただくしかないと思います。それはそんなに嫌なことではなく、圧倒的自分発揮なのです。一人では心細いこともあるでしょう。だから多様な他者と協調していく人間に育て上げていくのです。それがまさに幼稚園が一から丁寧にやっている場所なのではないのでしょうか？それこそが、今後必要な長期的で根の深い「学力」の基盤になると考えていただけたらいいと思います。



子育て教育相談室

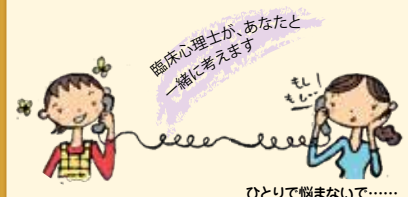
【相談日】

毎週火曜日・金曜日（年末年始、祝祭日を除く）

【受付時間】

10時～12時

13時～15時



相談専用ダイヤル

045-534-8837

公益社団法人 横浜市幼稚園協会
http://www.kids-yokohama.or.jp
TEL 045-534-8708

第2回 教員研修大会

平成27年10月21日(水)

第1 分科会

西公会堂



健全な身体能力を幼稚園で育む

講師 ● 日本女子大学名誉教授 岩崎 洋子 先生

今回の研修会は運動会が終わった直後の時期であることから、運動会の種目に着目して講演が進められ、次のような内容を中心に具体的な内容に踏み込んだ話がされた。

運動面での発達状況は、以前は平均値に属する子の人数が一番多いのが

通常だったが、現代は出来ない子と出来る子に属するボリュームが多く平均値に属する子が少ないのが特徴となっている。また、運動(身体を動かす遊び)は楽しく、面白いと感ずることで病気への身体的な面での抵抗力等になり、日常の生活を円滑にする能力に繋がる。保育者には子ども達の役割をほめ、関わり、環境を与え、一緒に楽しむことで子ども達の運動(あそび)能力



を幼児期に育てることが求められている。あそびの環境が少なすぎる状況は、育ち盛りの子ども達にとって、今日の新たな課題である。

岩崎先生の話から、幼児期の運動(あそび)とのかかわりは生涯の健康の基礎を作る重要なことと改めて学んだ。

(広報部 内藤 光雄)

第2 分科会

鶴見公会堂



子どもの成長と絵本

講師 ● 児童文学者 斎藤 惇夫 先生

斎藤先生のお話は、絵本を読んでもあげることについて、幼稚園として、保育者として、重要な役割があることを改めて考えさせられた。人間に最初に与えられた能力が「聞く」とい

うことであり、母親のお腹の中にいる時から聞いている。そして、授乳の時、母親が語りかけ、自分が愛されていると実感し、お腹も心も満足する。その子が本を好きになるかどうかは、幼児期に幼稚園や家庭でどういう絵本をどれくらい読んであげたかで決まるので、絵本を読んでもあげる時には、絵本を選

び、最低20回～30回音読してから読むべきである。日本を変えていくのも良くするのも子ども達がいきいきと生きていくことにも繋がるので、これまで以上に真剣に絵本を読んであげて欲しい。そして絵本がとても大切であることを保護者に伝えて行く役割も幼稚園が担っていることを忘れてはいけない。

(広報部 関根 由華)

第3 分科会

横浜市教育局



幼児期に育てるべき力とは

～接続期を通して見えてきた幼児教育の大切さ～

講師 ● 横浜市こども青少年局 保育・教育人材課 幼・保・小連携担当課長／教育委員会指導主事兼務 寶來 生志子 先生

第3分科会では、横浜市内で盛んな幼保小連携事業についてさらに充実したものにするため、幼児教育と小学校教育との関係について様々な角度からお話いただいた。

始めに寶來先生が促した歌を会場

の全員で歌い、気持ちが一になった後、乳幼児期の子どもの理解の重要性や小学校から見える幼児教育の意義などに触れていった。幼児教育を小学校の先生に理解してもらうために必要となるアプローチカリキュラムについても触れ、小学校と幼稚園という大きな違いのある制度の中で、子どもを理解する

という視点から幼児教育を考えることができた。

講演は、参加者同士が寶來先生から出される課題を話し合いながら進んだ。参加者は、講演内容を日頃の保育と比べ合わせ、問題意識を身近なものにしている様子で有意義な講演であった。

(広報部 浅沼 郁子)

編集後記

暖冬といわれていたこの冬もいよいよ本来の気温になってきたようです。園庭を走り回っている子どもたちに触ってみると上着は冷たく、内側にいく程暖かい、背中少し汗ばんでいるのには驚きます。本年度も終わりに近づき集団で遊ぶことの楽しさを自分から求めて経験している子どもたちの目は生き生きしているように見えます。

年間を通して行ってきた特別研究班、各支部研究、研修会は教員研究大会を期に一段落となりますが、これら私たちが学んできたことが、日々変化していく子どもたち一人ひとりの成長の一助になることと信じています。(広報部 安藤 宗博)